第３回千葉県食品等安全・安心協議会（概要）

Ⅰ　日　時　　平成１９年６月５日（火）午後１時３０分から４時２０分

Ⅱ　場　所　　議事（１）　　千葉商工会議所 12 階　研修室 A

議事（２）～　三井ガーデンホテル千葉 4 階　天平

Ⅲ　出席者　　田井委員、文入委員、鈴木委員、渡辺委員、石丿委員、嶋谷委員、樋口委員、梅澤委員、大西委員、小林委員、天野委員、山口委員、笹川委員、田中委員、北村委員、羽田委員

講師・オブザーバー：中村食品監視課長（東京都福祉保健局健康安全室食品監視課）

Ⅳ　議　事

（１）リスクコミュニケーション・セミナー

・講演「東京都におけるリスクコミュニケーションの取り組みについて」

・質疑応答

（２）今年度のリスクコミュニケーションの実施方法について

（３）報告事項（基本方針の策定について）

（４）その他

Ⅴ　会議要旨

◇傍聴者なし。

◇羽田会長あいさつ

・お忙しいところ、お暑い中お集まりいただきありがとうございました。

・当協議会は、昨年４月から施行されました「千葉県食品等の安全・安心の確保に関する条例」の規定により発足し、昨年度は、食品等の安全・安心確保のための施策を定めた「基本方針」の策定に向け、作業部会を設置し検討を行い、当協議会から県への報告を行いました。県は、この報告を踏まえて本年３月に「基本方針」を策定し公表したところです。

・この基本方針の最も特徴的なところは、「リスクコミュニケーションの促進」の項目が入ったことです。その中で、当協議会において、効果的なリスクコミュニケーションのあり方について検討していくこととされています。

・本日は、リスクコミュニケーションに関する専門家である 中村 憲久 先生 をお招きし、御講演いただくこととなりました。後ほど、質疑応答を行いますので、協議会委員だけでなく、県の関係職員の方々にも御参加いただき、共に学んでいきたいと思いますので、皆様には、活発な意見をいただきたいと思います。

・御講演と質疑応答の後、これを踏まえて、今年度のリスクコミュニケーションの実施方法について検討することとしておりますので、委員の皆様方には、忌憚のない意見をいただき、千葉県のより効果的なリスクコミュニケーションの実施に向け、協議会として意見を述べ、協力してまいりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

【議　事】

（1）リスクコミュニケーション・セミナー

◇講演「東京都におけるリスクコミュニケーションの取り組みについて」

（東京都健康安全室食品監視課長　中村 憲久 氏）（資料１－１、１－２）

〔資料１－２について〕

・意見交換会をコーディネートする能力が問われる。コーディネーターの育成が重要であると感じた。

・都のHP（食品衛生の窓）は40～50万件／月（ノロウイルスのあった昨年12月は120万件）のアクセスがある。言葉遣いを含め、HPをわかりやすくする工夫が原点であるかもしれない。

・企業はどのようなマネージメントをしているかを伝え、コミュニケーターは立場が違う人の間に入ってわかりやすく伝えることが必要。

〔資料１－１〕

・パワーポイントに基づき説明。

・詳細は、内閣府食品安全委員会HPを参照。

（URL：http://www.fsc.go.jp/koukan/risk190511/risk190511_kouensiryou.pdf）

〔その他〕

・食品安全委員会リスクコミュニケーション専門調査会では、今年度、リスクコミュニケーションの検証方法と自治体における取組みについて検討することとしている。

◇質疑応答

○羽田会長

・コミュニケーターはどういう人を対象にどういう風に養成するのか。また、一つの職種として成り立つか。

○中村課長

・都では、保健所職員向けのリスクコミュニケーションの手引き書を作成することとしている。リテラシー（読み解き能力）が問われる。

・社会心理学や宗教学者が、専門知識を把握した上で、いろいろな立場の人の仲立ちをする方が良いのではないかと思っている。

○羽田会長

・制度をつくったとしてもそれを受け入れる体制が必要だと思う。

・資格をつくるとするとどのように制度設計をすれば良いか。

○中村課長

・対応すべきリスクにはいろいろな分野があるので、分野ごとに違うのではないか。

○北村委員

・リスクコミュニケーターとファシリケーター（進行役）を区別しているか。それができない部分が、リスクコミュニケーション自体を定義できない一つの原因ではないか。

○中村課長

・リスクコミュニケーターの役割では、単に伝えるだけでなく、良い相乗作用を生むこと

が期待される。

・リスクコミュニケーターの役割についてはいまだ構築されていない部分があるので、この協議会で仮説をおいて取り組んでみて、実行性があればそれが良いということになるのではないか。都の手引き書の中でもモデルを示そうと思っている。とりあえずやってみて、検証していけば良いと思う。

○北村委員

・日本語と英語の関係がわからないために、うまく伝わらないということがあるのではないか。

○中村課長

・リスクコミュニケーションについては、食品安全委員会でも、意見交換会だけではなく、もっと広義でとらえている。

・コンラッド博士は、リスクをゼロに近づけると無限大のコストがかかることについて「リスクのトレードオフ（交換）」という表現をしていた。「トレードオフ」とは二者択一の意。ただし、トレードオフまでもっていくには、十分な対話が必要との指摘があった。

◇新委員紹介（人事異動などに伴う委員の交代）

・全国農業協同組合連合会千葉県本部営農直販部長　石丿 達朗 氏

・社団法人千葉県食品衛生協会専務理事　大西 三郎 氏

◇西田技監あいさつ

・委員の皆様方には、平素より、県民の食の安全・安心の確保のため、それぞれの立場から御尽力いただき、感謝申し上げます。

・また、本日はお忙しい中、千葉県食品等安全・安心協議会にお集まりいただき、誠にありがとうございます。

・ さらに、東京都の中村食品監視課長には、長時間にわたり御講演をいただき、ありがとうございました。また、これからの審議にも加わっていただけるとのことで、重ね重ねお礼申し上げます。

・さて、最近は、大手菓子メーカーにおける衛生管理問題や虚偽誇大表示された健康食品による健康被害など、食の安全・安心に係わる問題がマスコミでも大きく取り上げられ、依然として、消費者の不安・不信につながる事例が後を絶たない状況にあり、食品等の安全・安心を確保していくことは、県政の重要な課題であります。

・このような中、本県では「千葉県食品等の安全・安心の確保に関する条例」に基づき、基本方針を本年３月に策定いたしました。この策定にあたっては、当協議会おいても貴重な御意見をいただいたことに深く感謝申し上げます。

・この方針では、情報や意見の交換を行うリスクコミュニケーションのあり方について、協議会委員の皆様方に検討していただくこととしておりますので、今後とも御協力をお願いいたします。

・ところで、牛海綿状脳症、いわゆる BSE の発生から 5 年余り経過し、この間、県では対策

を着々と進め、平成 13 年の国内 1 頭目の発見以降、県内では発生が無い状況です。

・しかし、米国産牛肉の輸入対象月齢を緩和する動きや、BSE の全頭検査を継続するか否かなど、ここに来て、BSE に係わる話題が新聞などで取り上げられている状況があります。

・そこで、県としましても、今後の BSE 対策について、県民の皆様から様々な御意見を伺いながら進めていきたいと考えており、本日これからリスクコミュニケーションの実施方法について御協議いただく中で、御意見を伺えれば、と考えております。

・最後に、今後とも本県の食品等の安全・安心の確保の推進について御指導いただきますようお願い申し上げるとともに、委員の皆様の益々の御健勝と御活躍を心からお祈り申し上げまして、挨拶とさせていただきます。

（2）今年度のリスクコミュニケーションの実施方法について

○事務局から、BSE 対策の経緯及び県として BSE をテーマとしてリスクコミュニケーションを実施する旨説明。

（意見等）

○文入委員

・これまでの国からの補助金はどのくらいであったか。県はどのくらい支出していたか。

○事務局

・全頭検査すべて国の補助で、平成 18 年度については約 3,800 万円であった。

○文入委員

・消費者の立場から、（21 ヶ月齢未満の牛の検査に対する）国からの補助が切れても、最初の発見県としては、何とかして続けていただきたい。

・リスクがどの程度あるのかわからない、信用しきれていない、怖さがあるということを踏まえての希望である。

○中村委員

・東京都としてもまだ方針は決まっていない。

○渡辺委員

・先日、稲を飼料として食べさせた牛の肉の試食会に出させてもらったが、肉骨粉を使わないというような関係でそうなったのか。

○樋口委員

・バイオエタノールの関係でトウモロコシが高騰している。飼料の自給率が低い、米の余剰などを考慮し、飼料としての米の栽培に取り組んでいる。

○北村委員

・肉骨粉が使われていないといわれても事実はわからない。

・わかっていることとわからないことを整理するためにも、リスクコミュニケーションを開催することによってわかるということであれば、やるべきではないか。

○文入委員

・県としてもぜひやってほしい。千葉農政事務所で実施した BSE のリスクコミュニケーションでも多くの質問が出ていた。

・質問を想定した資料をそろえた上で実施していただきたい。でないと疑いがちになる。

〇羽田会長

・ウェブ（インターネット）上でも資料を添付してダウンロードできるようにしていただければ良いのではないか。

・リスクコミュニケーションについては、当然やった方が良いと思うのでやっていただきたい。

（以下、中村課長の講演の感想及び BSE 以外のリスクコミュニケーションのテーマについて）

〇田井委員

・これまでは、リスク評価に基点がおかれた専門的な視点からのものが多かったが、今日の講演は、受け手からの立場を組み入れたリスクコミュニケーションのあり方で、新しい方向が示された。

・サービスは一方通行であるが、ホスピタリティは双方向であるという原理まで踏まえたリスクコミュニケーションは本物になっていくという感じを受けた。

・非常に困難ではあるが、行政に携わっている方からそういう問題提起を受けたということを非常に心強く思う。

・今後も様々な意見交換の機会をお願いしたい。

・最近、中国からの輸入加工食品についての質問が急増している。マスコミの報道もあり、中国でもきちんと管理している工場もあるが、あたかもすべてに問題があると受け取られている雰囲気がある。

・自給率の観点からも、輸入食品は欠かせないテーマだと思う。

〇文入委員

・講演について、このような考え方が出てきていることを知らなかった。当初、国の BSE のリスクコミュニケーションでは、質問すると抑えられるような受け答えがあり、リスクコミュニケーションに行かなくなってしまったという経過がある。

・消費者 対 事業者・生産者ではなく、人間として安全・安心を追求していくことが必要。

・ポジティブリストについてとことん話し合う場がほしい。

・食育など日本の食全体を捉えるような機会を検討してセッティングしてほしい。

〇鈴木委員

・リスクコミュニケーションのコーディネーターの選び方が大事だと感じた。

〇渡辺委員

・大変勉強になった。

・食べ物は人が生きるうえで絶対必要なことなので、安全・安心が当たり前というふうにつながっていけば良いと思う。

〇嶋谷委員

・水産業は自然が相手なので、リスクが非常に大きい。情報提供、生産管理に努めている。

・講演で「トレードオフ」（二者択一）の話があったが、消費者には、安全・安心には費用がかかるという認識も持ってほしい。

○樋口委員

・講演を聞いて、BSE の発生以前にこういう考え方があればと思った。

・コミュニケーターが重要な位置にあり、その育成が大きな課題だと思う。

○梅澤委員

・食育ボランティアとしても活動している。

・生産者として一生懸命頑張っているが、消費者と生産者が話し合う場が少ないと感じる。

・フォーラムなどでも意見の食い違いがある。消費者の方は安全・安心のみを望むが、生産者にとっては生活もあり、共生を図らないと生活が成り立たない。

・行政にも入っていただき、話し合いの場を持っていただきたい。

○田中委員

・マスコミの報道に過剰に反応したり、ブームが終わると急に無関心になったり、メディアに流されていると感じる。

・BSE の問題については、普段の生活ではあまり思い出さないのではないか。

・BSE 発見県として、BSE をとっかかりとして、リスクコミュニケーションを実施してはどうか。現在どういう状況にあり、人体にどういう影響があるのか、正しい情報を提供していただきたい。

○笹川委員

・お客様からの御意見も、多方面から多くの情報が寄せられる。

・各セクションが守るべきルールが守られなければならないが、ケアレスミスがある。お互いにフォローしあっていくことが大切だと思う。

・お客様相談室では、中国産食品、異物混入、健康食品の声がのびている。答えたくてもトレースしきれず、説明できないところがある。

・正しい情報を伝えることが重要だと思う。

○山口委員

・「栃木県産とちおとめ」の残留農薬や中国産食品の問題などが発生しているが、今後も考えてもみない問題が出てくるかもしれない。

・いかにタイムリーに正しい情報について話ができるかが重要で、生産者、流通業者、消費者が話し合える場を作れたら良いと思う。

○天野委員

・当社でも本日、（放射線照射食品の混入による）自主回収の社告を出したところで申し訳なく思っている。

・輸入原料については、情報が少なく怖さを感じている。

・対策について報告することが有効というお話を聞いて、重要性を感じた。

・今回の自主回収の件では、皆様が意外と知識があったということもわかった。

・情報をきちんと流すことが大事で、BSE についてもたくさんの情報を提供して、リスクコミュニケーションの中で結論を出していくというのは正しい手法ではないか。

○小林委員

・私たちは、納入業者から食品を購入する消費者でもあり、調理した食品の提供者でもある。

・納入されたものは安全・安心なものという前提で購入している。
・納入業者が、安全・安心についてどのように考えているか知りたい。納入業者の協会などにも本協議会の委員になっていただくなどして、勉強していきたい。

〇大西委員

・リスクコミュニケーターをどうするかということに関心がある。
・リスクコミュニケーションの手引書を作成中とのことなので、ぜひ参考にさせていただきたい。
・自主管理を徹底するという意味が難しいと思っている。ものをつくる方のコンプライアンス（法令遵守)、実際に携わっている方の姿勢が大切だと感じている。
・これまでの食品衛生講習会だけでなく、いかにコンプライアンスを徹底させるかも一つの課題であると感じている。

〇中村課長

・東京都では、中小企業向けに食品衛生自主管理認証制度を食品衛生協会などの協力のもとに実施しているが、食品は複数の県にまたがって流通するので、他県とも一緒にやっていきたいと思っている。
・最近のさまざまな分野での法改正では、自主管理（規制緩和）と罰則の強化を盛り込む傾向にある。
・自主管理に関し、自主回収では、企業の対応能力、姿勢、信用が問われているのではないか。

〇石丿委員

・リスクコミュニケーターの役割として、生産者に対してと消費者に対しての二通りあると思うので、JA グループとしてもしっかり構築していく必要があると思っている。
・ポジティブリスト制度に関し、トレースできる仕組みをつくる作業をしているところであるが、個々の生産者の記録が重要であり、生産者に対して、そういう意識を徹底させていきたいと考えている。
・リスク管理の体制づくりもきっちり進めていきたい。

〇羽田会長

・リスクコミュニケーションの方法について御意見をいただきたい。
・ウェブ（インターネット）上でもメールでのやりとりなど、双方向性のものを含めてはどうか。

〇北村委員

・すべての立場の人が参加して、すべての人の意見をいただき、双方向のコミュニケーションができれば良いと思う。
・テーマについて YES か NO かになってしまう傾向があるが、わからないことによる不安を解消できれば良いと思う。
・O157 や BSE が発生した当時は、わからないことが多くて大変だということだけで進んでしまい、いつのまにか実像と虚像が合わなくなってしまい、現在の食の安全・安心の問題につながった一因ではないか。
・いろいろな人の意見を聞ける場をどのようにつくっていくかが問題ではないか。

○羽田会長

・リスクの確率を伝えるのが難しい。二者択一ではないリスクコミュニケーションにしていただければ良いと思う。

○中村委員

・ヒューマンエラーを事故の原因とする解析については、それだけをよりどころにすることはしない方が良い。

・なぜなら、多くの事故に 3 つの要因：すなわち、ヒューマンエラー、偶発的なもの（確率的)、構造（管理体制）が重なって起こるとみなすことができるからである。

○羽田会長

・先に策定された「基本方針」の中で、協議会は、県が実施したリスクコミュニケーションの評価を行うこととされている。

・今年度のリスクコミュニケーションの実施後、当協議会でその評価を行うことになるので、委員の皆さんも積極的にリスクコミュニケーションに参加して、実際に体験していただきたい。

・開催日時等について事務局から連絡してもらえますか。

○事務局

・今年度のリスクコミュニケーションについては、本日、御議論いただいた内容を踏まえて、実施方法等を決定し、日程等詳細について、委員の皆様に御連絡し、出欠等の確認をさせていただきたい。

・次回の協議会の中で、委員の皆様が感じたことをお聞かせいただき、次年度のリスクコミュニケーションにつなげていきたい。

・各委員の所属する団体の方の御参加についてもお願いしたい。

（3）報告事項（基本方針の策定について）

○事務局から、基本方針の概要について、資料に基づき説明。

（4）その他

特になし

以　上